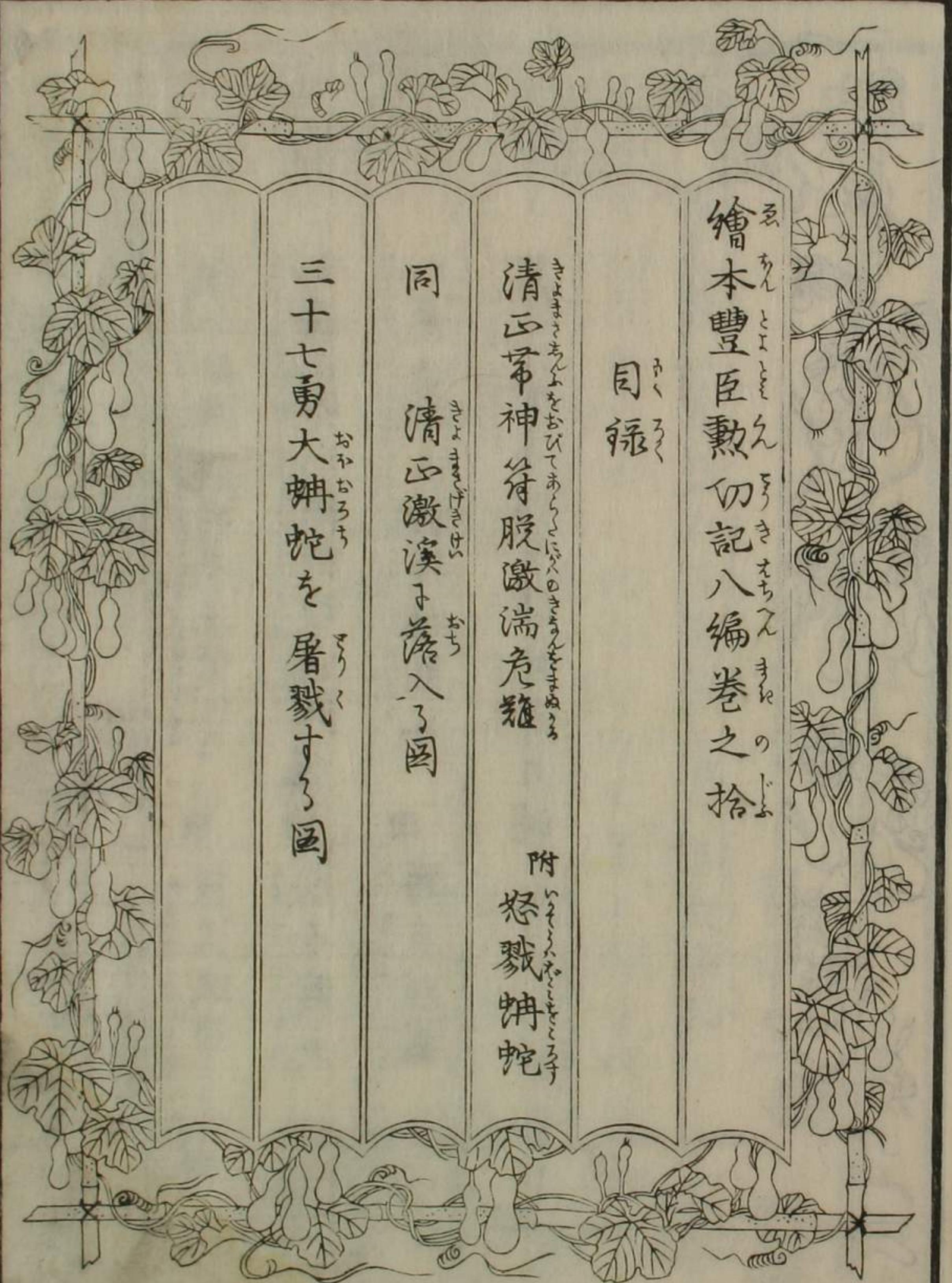


門へ遠13  
2209  
卷 80



清正發烽與隆景面背攻了 附 放火城中  
加齋小早川激陷被山城 屬附金子戰死  
加齋勇士力戰遂擒熊谷 附 勝直服義  
其二金子侍毛清潔死の圖



繪本豊臣勲功記八編卷之拾

東京

櫻澤堂山 刪補

怒駁姉蛇

清正帶神舟脫激渓危難 屬

宋の孝先尚書と為て周確又次て省又居を妖變おきよ  
滅もと謂り是効地正よく邪妖と避るの理あるもの  
と。經令清正妖怪と劣るといふとも。正と以て茲又至る。  
邪妖いくんぞ害と加ふるあとと得んや。然わど不三十  
人へ互々扶りつ助らしもつ。帆山の危難も過免出で  
行先まもく 辛攀苦躰。二日と徑通り一うども。這ま  
での武勇よや爰どりん。房へくる妖物變化もかど。當日  
ハ七月十四日の事。正午よへ餘量速き。同畠の樹間よ

と。まづと向面と見て行へ。断崖の下きこと十餘丈岩  
石の上より怪しき樹木根と支柱枝と結び。逢ふあつて生  
徊る。また溪梢と看下せば。溪が上より溪の下へ瀑布と  
あつて零る所。數十丈もありとあがえ。水落る声を  
の如く。水煙徐く雲霧よ等。這辺へ两岸をべて嶮しく  
とば。溪へ下る徑さへもあく。此程溪梢へ下りて何んと。  
て樹の股峯の肩と記。又町をど來りてゐる。複崖崩  
れて溪洞へ下易き場所ありたりとば。先やうより下ん  
とて。各々まとまと擅合て。七八尋をど下まつて。溪の傍よ  
近づきつも。水面をよく観くべ。滄くとして中流へ底巻  
量とも観竟ぐ。然ども向面の岸低く。樹木の疎よろ

微き々きく看くえて。幽ゆう微き々き水みずを淪なまくくとなまくる。小城おぎ下し緜清まつさき正まさあいびよ。徳勇士とくゆうしようちち爲めひ。遠とほく听きやる。溪せの端は。是これ造つくり山さん中なかか一いちの難役なんえきふして。老仙ろうせんも怖畏おぞきとと。激溪洞せきせきとう。一箇いちの大蛇おおへびと。治はらき所ところあり。ひそちん。然しかりてもまた。一箇いちの大蛇おおへびと。治はらき所ところあり。と。語ごり絶とがりて。行ゆく。大溪洞おおせきとうの口くち。水みずと。激しづいて。腸くもよ裏うらき。耳みみとも裂さく。腰こしも裂さく。岩いわよ激しづいて。溪徑せいけいおよそ七しち八はつ写よ。溪せき流せきりゅうへ大おおる小石こいしと轆わむ。岩いわよ激しづいて。白波しらなみ連つづき。その底そこきあと矢炮やぱの如ごく。深ふかき洞くぼ下したの蓋ふたの如ごく。ありひへ過すぎき或ある涌わ紀き。畏おそりあんさんど言こともあい。浩ひろる羅ら耶やとい。又また練ねり済すくの勇士ゆうしありとも。翅つばあくんんバ後あとさるま

元々とべ。あくと後り城べーとて。各々准備ふ迄む。中少も木村ふ藏ハ太繩把て這方の大樹ふ繁と括り。おとと帮ふ溪崖へ卸紀遮拒ふあるべき木と伐拂ひ。其身へ頗る巖とあり。武者揮よ刀と膝被大繩の末と投て。底も知どざる水中へ吊地ニ灌と蹴投す。個々毫やと固も放とぞ額の汗あく膚と冷て着覆り在る。今又蹴入る。溪流ニづく不百丈かくも梢へ下らば。遂壁よある溪門ヨリて水底ハ岩角競紀級と立する如くある也え。あくへ落あばその身凍作ありとても保得るおと能ふまトと煩むるより有無易ふ一て。苦もあく向面の岸ニ辟りぬ。木村ハ原糸揚列す。其の産ふをべ。水凍

と得るあと溪巻の如く。水と揮ふて老樹ニ捉る。同ト太繩と三回繞し。継止て亦落び。太繩ともつて激流と這方へ泳返りつ。個々後りけへといふ得たりとて井上喪本役田能治寺又後りて。十人毎に清正あり。筋勇士ハミナ赤巖を乞ど。主計頭ハ其衆にて太繩の指授によと看え。一ヶ弓手又神府の笠拵抱へ灌と溪中へ蹴投つも。激波吹分撥分て。中流まで出する時持つ太繩岩ふ擣て。亡流くとつふうとおもえべ。中より拂斬と撥切。兩岸の諸士危や堪。又。江氣の如く覗廻。我もくと水よ跳入。中ふも大膽不敵の又造力繩も持とぞして。翔禽の如く下流又支行溪へ

漢と眺入て。水の落際又臨止り。流束了べ助りんと。身と  
纏ふ一て待幕。遙大將清正へ。纏の切ると。方より  
も。溪洞の底と二三間。足踏止らで。流居しげ。大丈丈あ  
る大将あどば。左の脚ふ力と投神翁と把て推戴く。其  
身へ磐石の如く。又りて。底の石をも踏込む。難ふ  
く向面の岸ふ着。安勇神力相助て。怪ノひすて。ふ感  
佩や。おきよ猪勇士大息と。次續て安達の懷恩と。あ  
たり。次よへ山坂と。漫さんとて。太き蔓蔓と。縷ねさ。お  
き残液せる。大纏。又串し。鬼彈城中の境。ある。籠籃の後  
の技比一。て。各器雜器。各種。す。食懸く推度。各寫。書ふ  
攀躋り。小鞆鞆。身と牢めつも。日光と観。書年。古に

う。午後突。進。と。食座。設けて。賄々飲。腰  
各程と取。各喫。了り。下座ある。山。あ三人。  
眞きて。例を。其ちや。眞々の。毒。ありて。遙  
化うと。近。不穎と。觀合セ。惘然。中。家。立本。儀と東  
南の。各。際と。視。今。まで。四。面。晴。殊。怪。雲霧。朦  
朧。と。て。次。雨。ふ。う。家。不。覆。羅。斯。ハ。不。審。あり。個。く。よ。弓  
矢。流の。准。候。セ。よ。と。て。二。流。と。辺。葉。と。弦。ふ。一。其。ち。や。妖。怪  
因。ふ。さ。へ。ぎ。う。べ。擊。損。さん。と。十。條。挺。砲。所。ろ。えて。待。構  
へ。う。次。漸。よ。山。谷。叫。動。一。て。砲。の。如。き。營。障。束。り。向。至。忽  
地。惡。疾。の。如。く。周。と。ある。ふ。ほ。ふ。て。東。南。の。各。際。う。日。月  
の。如。き。眼。と。眞。ら。一。裂。然。と。て。出。來。る。ハ。正。一。老。仙。う。

力綱切きのうのまき  
清正大激きよまさだいせき渙けん  
墮おち既まで不危ふあい  
かうんと歌うた



教をうる。大蛇蛇はお遠ある。また。其ハ撃捕とと大將の。  
声ふ夜にて家夏立本。こそハ元來伊豆守と守り。時高  
内羞助の名子あり。而て明智光秀。蛇術鍛練セ。人あきび。最も  
多院の娘を得たり。百目院の強茶もて。継けて二ツ響り  
る。流鏑を大蛇蛇の両の眼。擊中。おきふつゞい  
て。哨もくと。眼と口あ。口擊石。天也。勿地。勿地。傾る  
不ど震動。而て向面の谷へ轟轟清正。神も烈々。指揮あ  
れ替へ。亂発せ。うべ。溪水と巻起岩石と龜石。ね  
と。とて晴る。天日申の空上。昊くと。とて視え。ぬふ。  
皆。おぞ雲霧とあえ。正しく毒蛇が水氣ともて。吐舌

ると覺えたり。俺们二十餘人の者へ甚多列ありたり。や  
あよ。渠が毒々損らざれども。山民の柔弱あるへ。斯の如  
く。死する者不使あり。今日まで千辛万苦して。明日  
一日と經るものあつべ。再度故郷へ還るべきよ。這朝よ  
近んで死しゆるも。天令通りべきよやと。あむく。あ  
き成嘆息やら。徳勇士と叙め残の兵よ。除毒の薬を  
服さしめ。遠地へ残毒あんぬべ。内をぐ。所と換て亡兵と。  
鞍るべしとて。揃鞍をせ。一里半汗登りり。うや絶  
頂とあがめて。四面眼と遊ぶる山あり。夕陽と藉りて  
熟く覗き。古邑より西南を里軍斜ふして。樹木巧ふ繁  
茂。一々。豈焼山の城郭あり。多既の响喊の声うぜの

まふく 听ゆる。自方の合戦と桃むあらん。加茂主役  
 二十七人心中まもく 繁起。まづあつふにて死兵と萎  
 り。偽や死骸と狼あとの。穿出をあともやあらんと。大將  
 指揮あー。木村井上備ニ命ぜらきて。骸と瘞り一甚上ニ。  
 磐石と裁て壓持ト。其傍ニ見附と標させ。此地の合戦  
 罷でのち。懇切ニ吊養せらきぬ。然ベ幽宿へあく。ニ次第  
 し。四日一日ハ遠取ニ。身軀の疲と補ひ。然して城中へ響  
 投らんと。飽まで飲饗す。で食ひ倦まで息と養ふて。中元  
 の曉と待在マタク

## 清正発烽與隆景面背攻

属放火城中

下邸の虎ヶ罪よ彼あるも。金椒の獸ぐ南ふ後るも。よく

其彼ある所と知て。正ニ背くの道あけをばあく。今焼山  
 の山中ふ一て。熊と蟹ハ能その股ある。而と知る。蟹と猫  
 とハ自己のミと知て。他と知れ。焼山の城中の金子親忠  
 あるものへ。自も知他とも識。といふといへども。耻と知  
 るふ可と。巴。這ニ身命と捨るよ迄ぶ人と物ニ較比へ。  
 位品と斎を小仰ぐ。五十藏備ニ舉止ハ。彼  
 满天ニ彷彿。金子備ニ一ども。五十藏備ニ舉止ハ。彼  
 ド。只彼をべきと彼さをして。死と潔みある。ハ只彼忠死  
 ュ声名と潔ふ。世の疑惑と蒙ざる。今と知て後と  
 識ざるもの。よ仰ぐ。名と清ふ。家と亡を。宜。歎身  
 と苦めて家と興。そがよき。嗚吸其別。一。ゲ。きもの。

忠義の士の終始又あんあり。然あどよ加益清正木村井  
上表本脩ハ十日月の曉天ニ絕頂の峰と辟出安行あぐ  
らは先祖の精霊と弔礼あし。おきより路先へ地厚くと  
も墨く端また天高くとも僂る意地にて遠く慮主近く  
察。嗟とまく地又に憑る牛でふ念い。山と一里許下を  
る。遠辺ハ草木立ふあふ一て悉く赤石あり。今や軍の  
始ると度えて喊の者駆えり。其際又ハ駕くとふと  
吹きる者の吹えたり。饭田覓若清卑くも听属うち教びて  
稽士よ囁ひ。あとと吹きよ遠辺の谷聲。石と吹きる者の  
听せらるハ。見て軍用の石よりて。自軍の進る時とまつて。  
上より抛下もあるべき。渠脩と砖らぞ頑あら。

直地又城へ攻投らんと躍躋ると清正制止。最早城と  
乘取するが如し。彼民輩ハ石迺あらべれをば。まづ彼不  
よ往て辭ふ食鉢。然一て渠们と導指者と。小早川ふ  
も晴写とあらセ。面門の合戦と十分よさせ。故の臺と面  
方へ奈たセ。其虛と視微。山と下りて攻入こそ上策な  
らん。去來や石迺と荷擔來ちんとて職人工廠は歩倚る。  
石近車えてうち轡き。慌忙き手よ持とる。鑿鏽鉢と。う  
えよ投棄。いゝある御用の件て遠町へはあもーりらや  
と。言セも墨を木村又藏明星の如き眼と齧と睫。各脩  
ハ定で城中の金子が命と紫りて石と破虫。防禦の備  
よきるものあらん。ありの宋よ稟をべー。倘一難も難言

べ。一個も残さを首と刎りん。いゝよくと暉る。その  
懲憤又怖怯を。いゝふも推し。あふが如く。金子国吉の命  
を奉。那般よりと砍出をの。別よ存する事もある。令ハ  
敵して五へうーと。掉く稟をよ。大將清正迎み出。汝脩古  
をより城中へ棄内とりとをべ。其廢兵とバ取らやん  
とて。襟底の娘子採出。おとと汝脩と寢るあり。ど。まづ  
俺们よ食餌とさせよと。腰斧程と各取出。これと喫  
て山鄉より。伴來り一百姓と這地よ留ま。後日の恩賜を  
固く約して。三十七人甲冑よ身と固め。そとく短鎗と  
棍げて。彼石匠よ導指させ。於又六町下りたり。前ふ一  
聳の小峯あり。這峯こそ晴弓と揚るよ宣ーと。狼烟三條

立させ。そをへ囮き。小軍川隆京へ。過天八日清正又  
別れて。背路攻とあやふもあぐ。毎日てくよ面門  
より。火烹と城攻の態とあそひ。頃て清正と計議と約し。  
城中の名士の氣と。面門の方へ棄へせて。背門とやをく。  
放らせんとの謀計あり。おとづ防衛と城中よりも。大木  
大石と拵め。隙隙ふく拒撋りゆえ。男よやうよハ  
進みえむ。喊と仰りを洗と撃墓て。呂政進の擬勢を  
し。晴弓の日と待居より。既に十四日の夜があり。り。後  
山より進み。鬼神天物も越ぐとき。而ありと。吹つ  
るものと。へうよ清正猛勇ありとも。よも通り得るあと



能ふまつて唯正失と引定さむ返りよう一と廻ドつる。  
十五日の蚤朝より。城に向ふて攻させたり。今天ヤ七月  
十五日よりて清正が約セ一目あり。又空ありとへある  
へども。神佑不思議の主計頭。益までふ媛悔べきふもあ  
らむ。晴等と看あば死と顧む。是れ又面門と輕々破るべし。  
努力く怠るあとあくとと最ノ<sub>レ</sub>指揮ノ<sub>レ</sub>隊伍とうと先。  
豫て工支あゝ置く。牛炮といふものと正斜ノ進み也。  
牛大矢といふハ牛の背中へ百目の疾炮三挺づゝ結  
ひつけさせをうつて面方の門へあるときハ火矢ぶと  
おと切るよ<sub>レ</sub>也。次<sub>レ</sub>は彼卒八百人。おとふみ百の弓矢と持  
せ。喊を仰りて推進<sub>レ</sub>す。今日先進の斜將ハ桂又布左衛  
門宗家あり。燒山の本股へ馬と進むる時<sub>レ</sub>殉こそあき。山の

後背又三條の狼煙。天又冲て覗<sub>レ</sub>く。然と一て驚  
悦<sub>レ</sub>す。備へ清正怖<sub>レ</sub>くも。恐おく後背へ出ら<sub>レ</sub>く。誠  
又不思議の大將<sub>レ</sub>す。あと身の毛<sub>レ</sub>を堅て感服<sub>レ</sub>す。まづ陸  
軍へおとと告させ。まそく懇で激毛を。時<sub>レ</sub>又大將陸京  
ハ井塞<sub>レ</sub>又登りて瞬<sub>レ</sub>もせざ。後山の方と覗<sub>レ</sub>る所<sub>レ</sub>。晴等  
の狼煙<sub>レ</sub>と三條まで立上る。おとと見ろ<sub>レ</sub>小早川。  
井樓と胡跋と砲<sub>レ</sub>で下。本部の勇兵一万餘人と擇出<sub>レ</sub>。今  
清正が晴等の狼煙<sub>レ</sub>とあるうへ。些とも猶豫<sub>レ</sub>をべき<sub>レ</sub>  
あらず。追めや追め勇士輩。遙もあき山谷と越得て背方  
え出ら<sub>レ</sub>。大將<sub>レ</sub>ある中<sub>レ</sub>。何ぞ大遙潤<sub>レ</sub>。一て僅  
に<sub>レ</sub>。丁度<sub>レ</sub>さる嶮岨<sub>レ</sub>と。斯まで敵<sub>レ</sub>は渡ら<sub>レ</sub>。小城一里と

攻伍も徒々日と送るへ。足あき者も劣るべきぞ。死と怖きて古そ逃る送あき耻とおもひ名と惜まば。何者とう畏るべき。身と碎て進むとも。限へ一足も退べうらぞ。哨は纏りと大將陸京風捲起して正脚も進みば。おどみ隨ふ勇士輩。送よ耻合懲合。嘵く声にて推登る拒柵と備へ一城各軍。おとと視るより。其へ故兵へ近づいゝるぞ。防げや禦げと炮矢と砲石。石と轍わ木と投落し。正兵もあつて防戦を。這胸加兵を後へ。石五車も導指させ。背方の門も走近き。面方の壁窓と窺ふ。今や合戦正最中とおがしくて。多汽の奇喊の声。耳も震き听えり。清正上下三十七人。傍あそと競歎び。一稱の撫と讃嘆べ。

四方と視る。浩る嶮岨と援ミタリ。番兵さへ一個も在らず。意寧一と立若しく。屏牒互も索探子と施ケ。先と競ふて躍投。四角八面も燒地にて見とべ。防守の備へ更あり。名士一個も在合。されば意のを。城中と視虚陣。厥くコ火と放す。機會よく風の吹起りて怒焰爆くと燃熾り。燐燼散爛して。次第に本丸も焼移る。十七人の勇士達へ得たり。か一棟破て。面方の自軍よ豫と合せよと。遠隔は既に那陽も傾き。頭巴支城名と。斬伏突起惱す。クとべ。加々木浩る山谷と。哉て來一と。よ。最も知らざ。吐岐城中も謀叛人あり。誰孰あるぞ。捉と。同士敵のを去て。噪動を。主計政大吉あげ。是へ加益

主計頭清正。十万余騎の神軍。金子。鞍馬。後方の山谷を容易く弛緩。もや脅妨より乗投て。城墨。軍へ焼輪。方僅へ徐長。ふおもみとも。遁るべき路文。ふあ。脱蠶。戈にて降糸。セよと。ぬりく。攻みて。とべ。城名いよ。崩とくち。天足地首にて乱走。加藤小早川徹輪。燒山城。属。金子残死。獅子口と用て一連奮迅。まろ。胸へ。又山齊。一嵐。そく。と謂。り。駿よ怖。しくも。加反主役。コづく。三十人。よ。て。おの。城中。よ攻投。あと。よも。凡人。と。懷。もれ。ト。遠。胸。城。將。金子。傳。名。傍。耽。患。面。門。の。射。寨。よ在。て。自。軍。と。旅。旅。あ。ー。小。早。火。が。勢。と拒。挽。在。と。り。よ。おもひ。も。り。り。ま。城。中。よ。う。火。

言争て馬を拘い。后方當て驅地、又弛向ふ。然谷勝直へ  
送殉脇くも加茂が勇士。三十七人が守る弛入。十六貫目  
の練材棒と轟壓車と揮巴流。井上と砲木村と擲り。森本  
敏田と右は交赤星船と左は牽。あるひに進んぞ退ひつ。  
死力と發一て近とる。躍々縦き一金子親忠。安藤谷と殿  
をあら車縦りくと正斜よ怒砲の像く撃て投り。然谷  
よ力と添らき。火水と本と戮ふく。日本兵双の清正  
をきども。敵ハ大勢自方へ小勢後背路ハ猛火よ断き。  
走り。主計頭声と暴げ。城名いうをど猛勇ありとも。山  
城の時の妖怪よ抜きば。十ヶ一分の敵あるぞ。後へ退ば  
火よ焼きん。金子と拵て戮死せよと。退紀くと戮ふ相へ。

阿修羅王が梵家。天軍よ向ふ猛威を發し。双方智勇絕  
倫の大將陽又岡き陰又岡送又岡懋合。傍の実政のあ  
人をど。太刀の鞘刃のづくどけ。奮激血戰。一  
脩兵面門よ向ふくる。小早川隆景も本ひよ焦躁い。又  
城を拒抗とも。面門破の歎意倦ある。底よぞ城中既  
火とあり。徳清正の主従。義城のうちふにて。一士  
とども戮死させあべ。渠脩が熱切と姫嫉で見殺よさ  
り。あんじ。世上の口よ喰らきん。小早川隆景が本代ま  
での耻辱あり。進りくと激揚の声の。すゞ早らぬ不撃  
が隙あり。坂井太史と称号。突と砲抜て正斜の牛と志と  
そりよお擣きば。牛へいりつて砲出しげ。面方の扇よあ

ると秀る宋は作役一多挽數十挺。一吐は煙と發する者  
は牛へ牛をく奮激して氣の放と角と突投襲然とく  
づきと見るより。姫君太支牛と讐諭。推破りて大を發。  
小早川隆景の勇臣姫君太支吉祐焼山城の一番乗と呼  
ちう墓て迎入をば。おきよ縋て先陣桂み弟方坐つ。兵士  
と懸ま一札入を國吉ぐ源の軍兵革弓矢銛ともおちら  
さを。途と失ふて覗廻り。千僕万倒をもかどよ得たりと  
捌起難伏子角方面又跑散を。國吉ふ節若湯今へをやあ  
きまでありと桂ぐ隊伍不殺投し。故十五六騎擧てそ  
の身も致ケに勝とうざ。私軍の中よ戰死を。城名こ  
きよれ候にて。些もくぬらぞ。金ぢうぐよ私走にて面

門金く閑々とり。金子親憲ことと聆より。剣勇の心勿地  
れ。紛然と一て加益が隊よ。鞍被らきて鬱々とある。木  
村井上表本領田脩。金子篤安を中よ寧守と攻  
め。浩るところへ面門より。小早川ぐ法軍勢。拂廟の如  
く逼進り。不ぞ。金子。然各憾念あぐ。城を見棄て正一  
門地ふ。後路の方へ逃走。城の方と戻せば。端とて  
馬。兩眼と血と満ぎ。無名脩よ向ふてりふやう。こそ此城  
は。疑守あとへ。教場の軍よ切あるともて。主君の祝撰よ  
固てあり。然ども金是汝们ぐ。忠奮義激をふふよつて。よ  
く大歎を防ぎうども。加益ぐとて不背破せり。阿客

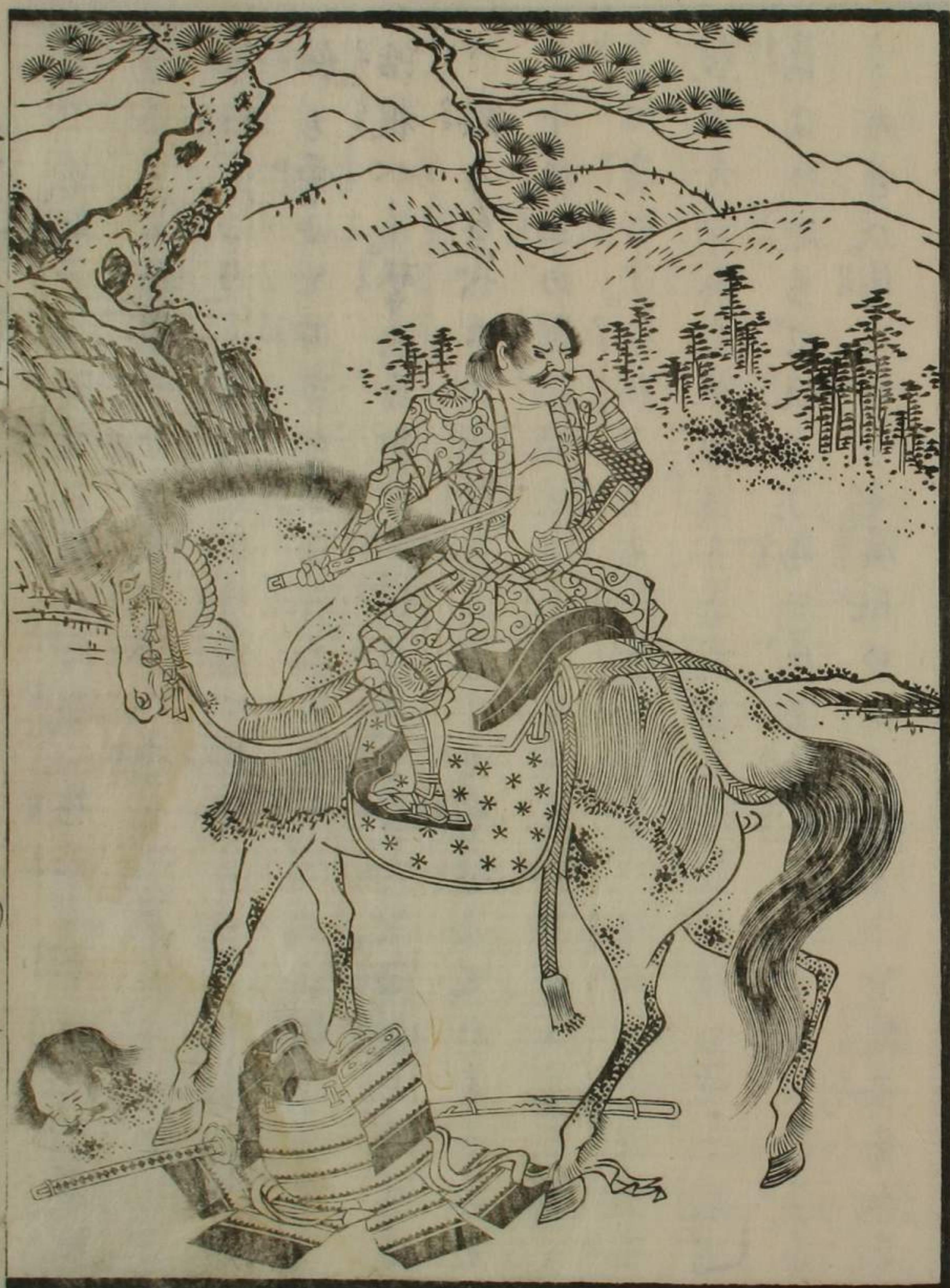
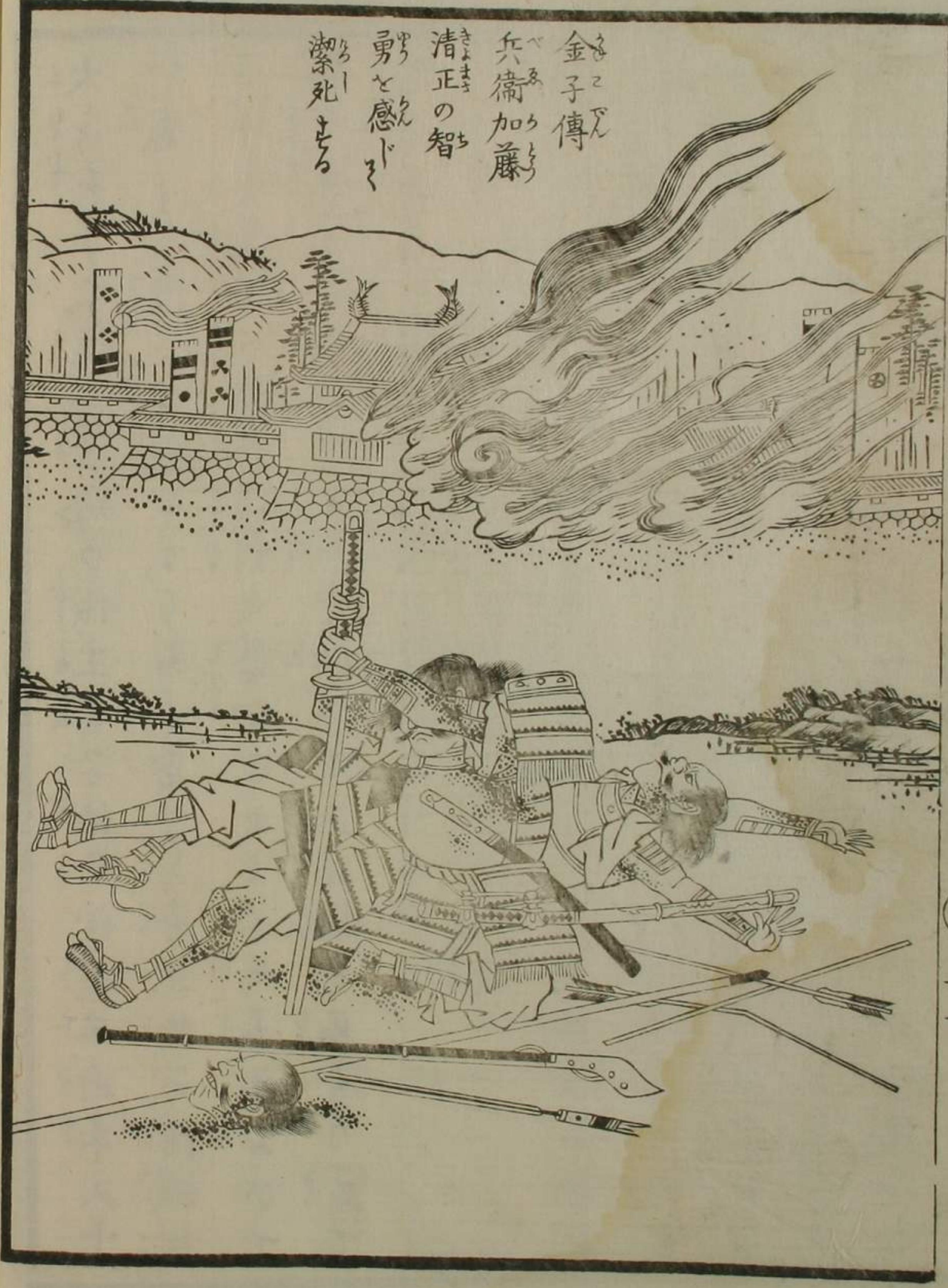
阿容と城と焼き。なんの面目あつて。従人<sup>の</sup>面と合さるべき。先度<sup>も</sup>尾落城の機會。既<sup>に</sup>戰死をへり。りきとも。憐くば主人元親と存亡と共<sup>に</sup>せんとと至り。今焼山の落城<sup>は</sup>人よくおきと仰<sup>ふ</sup>あざむ。天の助る所あり。然るに日あくぞ背方と破る。加夏<sup>の</sup>僉<sup>は</sup>久<sup>く</sup>凡人あるまト。嗚咽燃<sup>ゆゑ</sup>ひうる。長<sup>じ</sup>我<sup>ら</sup>の存亡危急。言をといへども既<sup>に</sup>徹<sup>く</sup>。遠期<sup>は</sup>近<sup>づ</sup>。遂<sup>に</sup>んで武士<sup>の</sup>ものへ。よく心<sup>を</sup>決<sup>す</sup>べし。人壽<sup>み</sup>五十餘年と船とを惜<sup>く</sup>ても猶<sup>豫</sup>限りあり。長くもあくぬ命令と賛<sup>たん</sup>めて。淹<sup>く</sup>く持<sup>た</sup>る兵と汚<sup>さ</sup>んこと。何程<sup>う</sup>悲感<sup>う</sup>ざらんや。昔<sup>は</sup>武勇<sup>を</sup>輝<sup>か</sup>て。未<sup>セ</sup>世<sup>は</sup>參<sup>そ</sup>切<sup>く</sup>と城<sup>を</sup>べしと。殊<sup>々</sup>六十有餘人と正円<sup>を</sup>備え

固め。決<sup>す</sup>も死<sup>ぬ</sup>。清正<sup>は</sup>陸<sup>續</sup>を撃<sup>ち</sup>拂<sup>は</sup>て。戰死せよと一喝<sup>す</sup>喰<sup>く</sup>。加夏<sup>が</sup>隊伍<sup>を</sup>突入<sup>す</sup>。その猛<sup>き</sup>あと奈羅延神<sup>が</sup>。夜又羅刹鬼<sup>と</sup>慕<sup>る</sup>如<sup>く</sup>。奮<sup>く</sup>とて東北<sup>を</sup>征<sup>めぐ</sup>くとて西南<sup>を</sup>侵<sup>し</sup>り。縱橫<sup>を</sup>盡<sup>す</sup>。亟<sup>き</sup>起<sup>く</sup>。一方<sup>を</sup>斬<sup>抜</sup>て。自軍<sup>の</sup>兵と顧<sup>せ</sup>ば。三百人をうち<sup>る</sup>。再<sup>び</sup>遣<sup>す</sup>隊伍<sup>と</sup>立<sup>せ</sup>。三十餘人と撃<sup>た</sup>す。自方<sup>も</sup>正<sup>に</sup>戰死<sup>す</sup>。而<sup>は</sup>騎<sup>を</sup>減<sup>さ</sup>。引<sup>ひ</sup>返<sup>す</sup>。加夏<sup>が</sup>陣<sup>へ</sup>。咄<sup>と</sup>咄<sup>と</sup>嘆<sup>て</sup>。丸突<sup>あら</sup>。這物既<sup>に</sup>面方<sup>を</sup>候<sup>え</sup>。加夏<sup>が</sup>隊伍<sup>の</sup>傍<sup>そ</sup>軍勢<sup>も</sup>同<sup>じ</sup>。城<sup>を</sup>逃<sup>げ</sup>て木村義本<sup>が</sup>。飯田船<sup>を</sup>。おの<sup>く</sup>主<sup>と</sup>守<sup>固</sup>りて。

次取ニシテ謀叛と禁面ところへ。金子親忠憤發して、級田清成を  
成りて隊伍と破り、遂ひて秀本正虎を殺す。隊伍突投て紅惣一。  
三連呻で家後を衡軋と立てる。堅陣と雖多く破て紅通  
り。自方と秀とバ八十餘人馬さへ残らず皆殺し。身死血  
コ泥とて盧紅又丸裂せり。九死至れど一生き残り  
て両眼と聞くむくの死矣者ふをども。大軍の歎とせ  
とも屈せず清正が本陣目的て絶入す。其へ摺挫と木  
村家彦赤星井上庄林鶴小城と稱とし。清陽一列又辟集  
起百重ニ國で樓起る。あをぐくめ又金子が後名一騎も  
諸らを戦死を傳名清今へ後思あり。戦場もちや至期あ  
りと。禮の上帶引解き。鞍笠又突起あぐり。天ふも聆する

大高声にて。豫乃弓雄の城主金子傳名清親忠。逝年八十  
一歳にて潔く自殺する。うかくぞく否既後不活能捉  
りと。矯言吐ふ。死首劫て奏功又セよと。馬上又おひて  
肚十文字又割裂き。太刀と加へて正逆相よ。馬より落て  
そ死失志へ。烈き武士の終没ありたり  
加多勇士力戦遂擒熊谷属勝直服義  
劫滅モとべ大地尚崩る。燒山の城。りある嶮ととのむ  
とつとも。滅果の期といんぐをべき。然べ遠城院  
破して守將金子傳名清最潔く戦死セ。うべ清正死  
ありとて。又かく奇懲の金子が終相又あるまづ  
勇将あり。うからぞ首と捉ことあり。君別ニ料理むね

金子傳  
兵衛加藤  
清正の智  
勇と感づ  
潔死ある



ありと制して那方と恵と着行べ。無名四弟左弟つ勝直。  
をあしも弱倦氣色あく。一照の療さへ負をも烈然と  
て戰ふ。主計改ことをとて。感嘆あること女うき。  
活る勇士と刀下の鬼よ化ことの最惜さよ。個ぐりと  
活捉べし。撃あととさへ得がき勇士と。活捕らんあと  
へ縋くべくと。熊谷ありとて。鬼神にてによもある  
ま。後山の蟹猫鬼す。み易くさんとおもふあり。遠く  
馬と突作し。活捉をよと。捨擲しきをば。飯田表本井上木  
村。承令をふと放礼くと立墓り。熊谷一騎と中よ取囲  
前よへ迎らで後より馬の尾筒後足ふんど。滅多糊よる  
一夕をば。馬へ堪らむ。尻風の如く例ると。熊谷をうさ

を眺御んと。其と記さセドと鶴赤星。かよ信せて。脛根  
拂ひ輶ふと木村脊髄が。左右の腕と。掻掲せば。表本井上  
背より壓捕て。ちよ肱ふとぞ。抑す。おきよ固て小早川  
も。加茂も陣と推寛げ。凱歌登て。一隊よ。兵士を彊め。  
まづ自軍の兵の。歿死負病と調祀させ。次よ軍功の兵士  
と紀して。当座の褒美。あくびよ負病の療治とセさせ。晚  
きべ七月十六日。己の上刻の偏と聆ころ。熊谷四弟左弟  
つと譽出させ。清正近ふ。遊侍て。勝直と熟く語る。身の  
長六尺二寸。赤うじて。毛色と。常眼尾立て頬骨荒  
虎顎。遂に生と見べ。佐損ねー。那羅延神うと。疑ふをく  
の相貌あり。清正心頗る効き。いふよ。熊谷四弟左弟つ又

本ノ足下の武勇戰術日本無双と謂つべ。吾故あが  
らも感むる不様りある。這上へ心と革め我小仕て熟切  
と。子孫又長く傳籍あし。名と天が下ニ隣さんこと。眞の  
本聖あるをやといふ。熊谷頭と左右ニお振の士死路又  
属あとい。原来帰元の如一とモ。二交君小侍仕こと。ハ  
てあきま士の耻る不足下多くの居ともちゆ又臨て心  
と憂ぢる居あらば。愉快しとおもひ玉ふ放。足下も秀吉  
の臣家あり。偏傍投とて敵の逼程は視破ら。忽地心と  
翻りて股毛る所存おもむら。承聽らんと徳同清正薨  
と隻頬又笑甚。訊条至極の理あり。吾ハ豈より臣家ふ  
りとて。二心あきい。勿論あり。然といへども。主君のこら

よそるの期。死毛るとぞうり忠義とせざ。生て其身と  
全ふ。一時の耻と變るとも。主君と助け家國と興を  
ともつて。大忠臣とぞるあと。我徇と待どして。汝も是  
と知りつ。人君も仕て死と惜。信義あくして股後を  
ろ。是禽獸も亦ろべき。遠吾君と心。又掛君の  
興廢よ臨て。一心撓まび。居死にて。君安みあらば潔く。  
今海が裏をところ。匹夫も達る忠小て。只一通りの  
命と否。ヨリ。死ると。臣耻と覺りて。君安穩と得る。あらば。  
世の如と變るとも。死と止りて。みとあそべき後ある。ふ。  
今海が裏をところ。匹夫も達る忠小て。只一通りの  
命と否。ヨリ。死ると。臣耻と覺りて。君安穩と得る。あらば。  
ると。熊谷さる。心解々と。嚴くと。矢。此熊谷と改役

せんと。匈と巧よ百交渉とも。敵の益よへよもあるま  
い。己き大將とする親忠と死と共よやんと頑て約す。其  
親忠と先よ死しら。名獨どりくと。這世よ残るのみあ  
らむ。故よ降て不忠と子孫よ殲をべきや。無益の匈と費  
さんより。もや首剗よと声暴らげ。瞋よ僻じて言生れ  
ば。清正おやひよち矢ひ斯ハ無法あり。無谷勝直治る意  
昧の輩の首と殴べき刃へあし。遂と取らむよ我祠と。心  
あづらふ承聽られ。汝が主の長考我幼元親四國よ武  
勇と恣ふ。金殻矣羅山の如く。幾戰場又臨むとも。不足  
とまう而あーといへども。其敢波て心缺く。その所謂  
いうんとおきと推す。主君秀吉去る嘉紀召征伐志玉ふ

機會元親後逼し。舟船ともつて後と断内府と被でうつ  
ものあらば。軍勝利と得べく。ノミ聲べき時と條所よ  
見弃。窓きに國と巨大ありとぞ外ふ望のあきものあ  
バ。内府の命よ順ふべきふ。其意も亦おとあくして。上使  
コ委礼の舉止とおを然る。秀吉勅令と蒙て。吸をざる  
と征伐かし。天下の政事と正一ふ。國と安んド民と  
惠む。是効地天下の武将。ノミ。長考我幼ハ聲より。四國の  
將よもあらざる。軍と進めて其正一う。ぬと伐内府  
の軍勢一連滅をば。伊豫とくど一。織波と均げ。阿波も大  
半撃破らし。其身ハ阿忍白地。又在て。本國へ返る。古とあ  
こをモ其居多一とつふといへども。亦おきと帮助。又術

と失ふ。合戦は逼る。晦に主人の存亡も思ひて。戦死  
まるとゆともう。是と誠の忠臣といふべきや。其本と推  
をめり。自己ら名聞利欲謀むをもの。是と名りて。前後不  
知の猪勇の武士といふ。遠征とくく。辨ふべし。其天  
下の將と國の將と戦ふ。天下の將勝といへり。是王  
法の大過あはり。殊々汝が今死して。不忠とあるの  
甚而謂へ。元末長ち我の家よおひて。代へ帝玉よ忠  
勤して。多切最も度大あり。然よ元親の不平よよりて。浩  
団象と一時の迷。根ととち枝と枯らんこと。甚ど  
惜み。吾が内府頼く助命の縁とおがため。土  
佐一國へ領受せられん。御内意おもしきども。旗下の  
従一

降系へ。食と継ぐ。あとうと。其と汝脩が残止り。主人と  
練めて正と改セ。家相続の謀セば。是诚信の忠臣あ  
らぞや。身退り。主んば。但よ死もべ。死もべき心ともつ  
て。堅く。條めて容ざる。主へ。あきものあり。听客あき門へ。  
主人の手ふ羅て死もべ。志う一金子傳。名湯へ。危急よ  
跡で心変せ。誠ふ妄想の勇士あり。感する。よ和徐りあ  
け。君傳名湯。死難とも。薄く葬り。一厄の碑と立て。  
渠がち忠と愚んと。汝が縁へ。長ち我の直居。金子  
が居らぬ。知らねども。縦令へ。づきの居ふもせよ。汝が  
義信の魂固く。汝がまぬ誠実あり。おがら。女しく疎き而  
ある。汝今備。言听き。あり。汝戦死をくさん。而

金子と共に葬るべき。存命あるこそ幸甚也。此は誠の忠義と達て長き我の家お徳せんとあらば。我の又殊ひ何分ともよく料理べ。我變にて不信へをまつた。然ども今汝と故郷さへめて。ことを計らもせんぞ。ふみに。條り縦使ひするあとあり。今より吾ふをよて。心と至きべ。天地不誓て車と料理まよをべーと。听ゆるみぞ。熊谷四郎左衛門。忠義一徹の心底。致行の固留あえど。天地の陰。此熊谷と。院果せんもの。よもあるまつとおもひ。ふ忍るべ。清正の信説義毎剛氣の耳と串ひ。り。その紀來親忠と這洞と。乞ぐも頼約しての戦死。あり。ふ其へ名と食る奉止のこと。智者。の懐説。方

儀を下めて。差の覓する意味ぞある。主家と達べき信策。あへさべ。只今の令よをひ。長く清正の家居とある。天地と偕よ忠義と謁さん。よきふ教と垂玉へと思ひて。言をふぞ。清正大よ悦森ちくと。すづ熊谷。繩と解くセ。即ち。又主役の盃と砍合。名刀鑑と祝酒。今より吉不吉と。をわんとして。名と革めて。吉村吉右衛門忠恒と。あのらセり。おきより加名の臣家とあり。本朝ハりふもさらあり。朝鮮御陣のまきりふも。一二とあらそふ。參切と。かの御内ふ鬼若村と。よびし。遠熊谷のあとふ。あんさて。其日の言ふ清正懇切。お猪口。金子。骨と。毛利城。おしが居の禁。お葬らセ。追居最も厚く吊ひ墓碑と

建營も焼山導指の山民ふうて。云殘廢燐やうと一うべ。  
そと見耳もる國民までも。清正が仁義ふ般に感ぜぬも  
のあそあうりと。然して甚后小早川が陣ふいづ。燒  
山面門攻の大功と称矣。勝軍と駕へりとば。隊衆もさ  
と後山越の艱難辛苦と絆は結同聲嘆いとく限り知  
らむぞ。彼是の賀と冷席ふにて。演るも本意と背くは宵  
すりと酒磁の筵と聞き。諸將坐席と同一うにて。後城の  
評議と語らひ。此機に乗じて土召ふ攻投。おのく抽切  
せしるべーと。信士又矢まで睨みとふくす。清正ハ攻  
陣ふ。右左にて翌朝より。焼山の構は柵と築陣廬とも  
うくて遠遭の降士。若村吉ち翁つ忠恒。よ加夏清。名清清  
指てぞ近參一くる

明治十四年六月十五日版權免許  
同十五年二月

東京府平氏  
出版

編輯人

東京府平氏  
櫻澤堂山

出版人

東京芝區櫻田備前町四番地  
大坂府平氏  
岡田茂兵衛

同

東區博勝町四丁目四十六番地  
南區心齋橋筋壹丁目四十三番地  
松村九兵衛

同

東京府平氏  
東京芝區三島町九番地  
中山市兵衛

發賣人

東京芝區三島町九番地

